

大学生の日本語力についての一考察
—英語力と日本語力の相関関係を測る予備調査より—

山本 博子

Preliminary research on the correlation between English and Japanese competence of
Japanese university students

Hiroko Yamamoto

要旨

国際化する日本社会において、大学生の英語力育成の強化が求められている。それと同時に、思考の基盤となる日本語力の育成の重要性も認識されてきている。

そのような動きを踏まえ、筆者の本務校では、英語教員と日本語教員（筆者）とが共同で、学生達に英語テストと日本語テストを実施し、その相関関係の調査研究を始めた。この調査を行うことにより、日本語力（母語力）が英語力向上にどのように影響しているかを明らかにし、英語教育と日本語教育の今後の課題を見出すことができると考えている。さらに、外国語習得力と母語力との関係性を明らかにすることは、日本語を母語としない人々に対する日本語教育の現場において、学習者の日本語力を、母語力と関係付けて捉えていくためにも役立つであろう。

現在は、2015年9月に行った予備調査の結果の分析を行い、英語テスト・日本語テストの問題点を明らかにし、来年度の本調査に向けての準備を進めている。

本稿では、予備調査の結果を示し、そこから明らかになった学生達の日本語力の問題点について考察した。

Abstract

It is widely said that English language competence of university students is vital for Japan in order to earn the status of an internationalized country. At the same time, the importance of their native language competence as the fundament for creative thinking is emphasized. In an attempt to address these issues English and Japanese language tests were given to Toyo Gakuen University students, and the correlation between their English and Japanese competence was investigated with the purpose of finding to what degree native Japanese competence influences the progress in acquiring English as a foreign language. The scope of this research includes identifying problems in both English and Japanese language education and developing effective teaching strategies.

The findings of this research also imply that native language (L1) competence should be taken into consideration when teaching Japanese as a second language (JSL) to non-native students.

In this paper, I analyze the results of the preliminary research conducted in September, 2015, and point out to the problems the surveyed students encountered in the language tests.

はじめに

国際化する日本社会において、大学生の英語力育成の強化が求められている。それと同時に、思考の基盤となる日本語力の育成の重要性も認識されてきている。

文部科学省では、2003年3月31日に「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想」を示し、そのなかの「英語教育改善のためのアクション」の6番目に「国語力の向上」を掲げているⁱ。具体的には、「英語の習得は母語である国語の能力が大きくかかわるものであり、英語によるコミュニケーション能力の育成のためには、その基礎として、国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成するとともに、伝え合う力を高めることが必要である。」としている。

その一方で、大学生ⁱⁱの日本語力の低下が指摘されてきているという現状もある。

これらの現状を踏まえ、筆者の本務校ⁱⁱⁱでは、英語教員と日本語教員（筆者）とで、学生達に英語テストと日本語テストを実施し、英語力と日本語力との相関関係を測る調査を始めた^{iv}。このテストは、各授業で学んだ内容について出題されるいわゆる中間テストや期末テストと異なり、学生達が現時点で身に付けている英語と日本語の実力を測ることができる。英語と日本語の実力を測るテストを行い、一人一人の英語力・日本語力の相関関係を測ることは、英語の授業・日本語の授業^vの今後の方向性・目標を考えていくうえで大いに役立つと考えられる。たとえば、文法力・漢字力・読解力等のどの能力が高い学生が、英語力も高い傾向にあるのか等を検討することにより、日本語教員は、学生達のどのような能力を伸ばせば、外国語習得力のある学生を育てることができるのかを見出すことができるであろう。さらに、英語教員は、学生達の日本語力を知ることにより、個々の学生の今後の英語力の向上の度合いを予測することが可能になると考えられる。

また、母語力と外国語習得力の関係性を明らかにすることは、日本語を母語としない人々に対する日本語教育においても、母語力との関係性を視野に入れた教育が有効であることを示唆することができると考えている^{vi}。

現在は、2015年9月に行った予備調査の結果の分析を行い、英語テスト・日本語テストの問題点を明らかにし、来年の本調査に向けての準備を進めているところである。

本稿では、まず、大学生の日本語力と英語力・専門科目の成績との関係について調査した先行研究及び大学生の日本語力の現状を調査した先行研究を概観し、今後どのような調査が必要であるかを考察したい。次に、筆者の本務校である東洋学園大学における予備調査の結果を示し、本調査に向けての日本語テストの課題について述べる。

1. 先行研究

1-1 日本語力と英語力・専門科目の成績との関わりについての研究

馬場良二（2006）は、大学生の英文和訳から日本語力の分析を試みている。「英語文では、‘I’がくりかえされる。これを逐一そのまま「私」に置き換えてしまう傾向」があり、

「明らかに冗長」な文になっているという指摘や、「I heard that there are many crimes and it's dangerous to live in Tokyo.」の「many crimes」を「たくさんの犯罪」とした回答があり、「犯罪が多い」としなかったのは、英語力の問題というより、日本語力がないからだと解されても仕方がない。」という具体的な指摘等から、通常は英語教員が学生達の英語の理解力を確認するために課す英文和訳文が、日本語力を測るための資料ともなりうることを確認することができる。

渡辺誠治（2011）では、日本語プレースメントテストⁱⁱⁱと理科系（生物）プレースメントテスト・英語プレースメントテストの成績の相関関係を見ている。そして、日本語プレースメントテストの成績と理科系（生物）プレースメントテストの成績との間には、「まったく相関は見られなかった」としている。一方、日本語プレースメントテストの成績と英語プレースメントテストの成績との間には、「緩やかな相関が見られた」としている。さらに、同じ学生が1年後に受けた英語学力テストの成績を見ると、「入学時に日本語テスト高1レベル以上の学生の英語プレースメントテストの平均点が、入学時の平均点から約50点上昇しているのに対して、日本語テスト中学レベル以下の学生では約10点の上昇に止まっていた。」とし、「日本語テストの結果がその時点での個別教科の学力を映し出すというよりも、その後の学力の伸長に深く関係している可能性を示唆している。」という興味深い指摘をしている。この調査結果から、早い段階で学生達の日本語力を測り、その成績を日本語教員だけでなく英語教員をはじめとする各専門科目の教員で共有することが、その後の学生達の英語力や各科目の成績の向上の度合いを予測したり、各学生への指導方法を工夫したりするうえで有効であることがうかがえる。

渡辺誠治（2011）におけるプレースメントテストという形態ではなく、学期末に実施される記述式試験の解答を検討することにより、日本語力と専門的な学力との相関関係を見出した研究もある。田島ますみ・佐藤尚子・深田淳・玉岡賀津雄（2011）は、大学学部の一般教養科目「生命科学」で学期末に実施された「薬剤耐性菌について、世界の現状を述べよ」という問いに答える記述式試験答案の、授業担当者と日本語教員との評価の違いを分析したものである。その結果、「答案評価と日本語力の評価には関連性が認められた。」としている。しかし、「答案点で中位の答案群についての文章点はあまり一致を見せず、文章点で最低点を取った答案は、答案点の上位2番目の点から最低点まで、最高点を除くあらゆる階層に存在した。」と述べ、「専門的な学力の優劣とはあまり関係なく文章力が劣る学生は少なからず存在する」と指摘している。テスト形態は異なるものの、渡辺誠治（2011）における日本語プレースメントテストの成績と理科系（生物）プレースメントテストの成績との相関結果と矛盾しない結論である。

渡辺誠治（2011）と田島ますみ・佐藤尚子・深田淳・玉岡賀津雄（2011）の調査結果は、日本語力と英語力、つまり母語と第二言語という語学力同士の相関関係と、日本語力と専門科目、つまり語学力と語学力とは異なる学力との相関関係が、必ずしも一致するものではないことを示唆していると言える。

1-2 日本語力の現状についての研究

日本語力については、作文力・読解力・語彙力・漢字力等のあらゆる面から、その現状を調査分析している研究が見られた。

境希里子 (1998) は、大学生の 160 (80 名分を 2 回) の作文について、一文単位で分析を行っている。「両親は、どんな学部でもどんな大学でもいいとは言わなかったにしろ、とにかく大学に入り、勉強なんて二の次でも積極的に行動し、自分の中で自信を持てる何かを見つけると言われた。」^{viii}等の「主語と述語が対応していない」例や「それは～からだ」のような呼応の形をとれていない例など、問題のある文を具体的に示し分類している。さらに、学生の作文には「一文単位での間違いは一つもなかったもの」があるが、「その作文の評価が高いか」といって、必ずしもそうではないことを指摘し、わかりやすい文章であるためには、「構成」「内容」という要素も重要であると述べている。

上村和美・藤木清 (2011) は、読解力を問う作文^{ix}と漢字力・語彙力・文法力を問う日本語運用能力テストの結果の関係性を調査している。そして、「文章量と日本語運用能力については関連性が認められない。」「読解力と日本語運用能力は若干の関連性が認められる。」等の結果を示している。

山本哲生 (2013) は、四国大学の「教養国語」における意識調査や成績等を分析し、「勧誘」や「魅力」等のよく使われる漢字の書き取りの間違いがあること等を指摘している。

山本裕子 (2013) は、「中部大学人文学部日本語日本文化学科の学生が入学時,3年生進級時,4年生進級時に書いた小論文」を分析し、「大学生活の中で文章に変化が見られるか、見られるとしたらどのような変化であるか」を明らかにすることを試みている。その結果、「全体的には学年の進行に伴って,大学生は書きことばを用いて多様な表現で,説得力のある内容を主張できるようになっていると言える」としている。しかし、その一方で、「第二言語を学習する過程において,学習者言語の一部が不完全なまま発達を止めてしまう現象」である「化石化」に通じる現象や、「表現のパターン化が年次進行に単純に解消するわけではなく,3年次には別の表現への偏り」が見られるという第二言語習得における「中間言語」に通じる現象が認められたとの指摘もしている。先に述べられたような「学年の進行に伴って,大学生は書きことばを用いて多様な表現で,説得力のある内容を主張できるようになっている」という現象がすべての大学生に認められるならば、卒業論文や就職活動における自己PR文などに対する教職員の指導の労力はかなり少なくなるはずである。しかし、必ずしもそうとは言えない現状があることを、大学における多くの教職員は認識しているであろう。したがって、母語における「化石化」「中間言語」等の現象が存在することの可能性を視野に入れて、大学生の日本語力を検討していくことには、大きな意味があると言えよう。

以上、本節では、大学生の日本語力と英語力・専門科目の成績との関わりについての先行研究と日本語力の現状についての先行研究を概観した。

先行研究では、英文和訳や記述式試験や小論文等から書く力を検討したり、プレースメ

ントテスト等から語彙力・漢字力・文法力などの日本語の知識の定着や運用力を検討したりしていた。さらに、英語力や専門科目の成績との相関関係を測る試みもなされていた。

しかし、具体的に日本語の語彙力・漢字力・文法力・読解力・記述力等などの能力が高い学生が、英語力も高い傾向にあるのか、または高くなる可能性があるのか等を検討した研究は見られなかった。大学生の英語力育成の強化、それに伴う母語の育成が求められている現状から、さらに細分化した日本語力の検証、及び英語力との関係の検証が行われるべきであろう。

そのことを踏まえ、筆者の本務校においては、多角的に日本語力を調査分析し英語力との相関関係を見ていくことにした。

以下では、まず、2015年9月に行った予備調査の実施方法及びその結果を示す。そして、学生の日本語力の問題点について考察し、日本語テスト本調査に向けての課題を見出す。

2. 予備調査の実施

2-1 調査対象

東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部の英語コミュニケーション学科3年生50名(25名×2クラス)を対象にした。本学では、英語コミュニケーション学科の2年生・3年生は、週2回の必修授業「Progressive English」を履修することが定められている。この授業は、徹底した音読練習を行い、英語の話す力を向上させることを目標としている。前年度の後半に行われる「TOEIC Bridge」のスコアによりレベルを分け、1クラス約25名で編成されている。1クラスに1名の担当教員が付き、週2回の授業を1年間同じ担当教員が受け持つ。予備調査では、本研究グループの英語教員2名が受け持っている2クラスの学生を対象にした。

予備調査であるため、研究グループの教員が担当するクラスで、尚且学習態度が比較的安定している3年生を対象とした。本調査では、学年や学科等の範囲を、より広げたいと考えている。

2-2 調査方法

できるかぎり多くの問題を解かせ、本調査への課題を明らかにしたかったため、内容が異なる、同じ出題形態のテストを合計4回実施した^x。いずれも授業の前半の約20分(英語テスト10分+日本語テスト10分)を使用した。

2-3 テスト問題

2-3-1 日本語テスト

日本語テストは、文法力・漢字力・読解力を問う問題で構成した。1回のテストにおけ

る出題概要及び問題数は以下の通りである。

【表 1】

分類	概要	数
文法	1、適切な文法が使われている文か否かを判定させる問題（文法事項：条件形・アスペクト・使役・受身等）	2 問
	2、語順を並び替えさせる問題	3 問
	3、文を構成する要素間の文法的・意味的な観点から、どのような解釈が可能かを選択させる問題	1 問
	4、ねじれ文等の誤文か正しい文かを判定させる問題	4 問
漢字	適切な漢字か不適切な漢字かを判定させる問題	5 問
読解	主題や指示語の内容等を選択させる問題	1 問
合計		16 問

文法の 1・3 は、平成 22 年から平成 26 年に実施された「日本語検定」2 級^{xi}の問題の中から出題した。しかし、日本語テスト全体の形態を揃えるために、選択肢の数を減らすなどの変更を随時施している。漢字は、同じく平成 22 年から平成 26 年の「日本語検定」2 級の問題の中から出題した。さらに、わずかであるが筆者の作成した問題も加えた。文法 2 の語順並び替え問題及び読解問題は、「日本語能力試験」N1^{xii}の模擬試験問題集^{xiii}の中から、内容を変更することなく出題した。文法 4 には、平成 22 年から平成 26 年の「日本語検定」2 級に出ている例文、及び、筆者・共同研究者が、日頃の学生が書く文を参考にしながら作成した例文を出題した。

すべて選択式問題で、解答にはマークシートを使用させた。

2-3-2 英語テスト

英語テストは、単文における文法的な正誤を判定できるか否かを問う問題に限定した。たとえば、“Accident! Yeah. It happen 2 hours ago.”のような例文では時制の誤りに、“He like the student from Australia.”のような例文では三人称単数現在用法の誤りに気付くことができるのかを問うている。このような例文を、“I wanted to be a doctor when I was a high-school student.”のような正しい例文と混ぜて、1 回につき 25 の例文^{xiv}を出題した。例文は、共同研究者である英語教員が作成した。

日本語テストと同様、マークシートを使用し、正しい文だと判定した場合は 1 に、誤りがある文だと判定した場合は 2 にマークをさせた。

英語テストの予備調査の出題問題についても、本調査に向けて現在検討を行っている。その検討内容については、別稿で論じることとする。

3. 予備調査の結果

本節では、欠席や遅刻等の影響がなく、4回のテストを同じ条件で受けることができたと判断できる8名の学生^{xv}の、日本語テストと英語テストの結果を示す。

表の左側には、日本語テストの成績上位順に、その正解数及び正解率を示す。さらに、右側には、日本語テストで1位であった学生が英語テストでは何位であったか等がわかるように、英語テストの順位・正解数及び正解率を併記した。^{xvi}

【表 2】

日本語テスト (全 64 問)		英語テスト (全 105 問)	
1 位	51 (79.7%)	2 位	60 (57.1%)
2 位	50 (78.1%)	4 位	56 (53.3%)
2 位	50 (78.1%)	4 位	56 (53.3%)
4 位	49 (76.6%)	3 位	59 (56.2%)
4 位	49 (76.6%)	6 位	53 (50.5%)
6 位	48 (75.0%)	1 位	69 (65.7%)
7 位	47 (73.4%)	8 位	46 (43.8%)
8 位	42 (65.6%)	7 位	49 (46.7%)

以上の結果を見ると、日本語 1 位の学生が英語 2 位、日本語 7 位の学生が英語 8 位、日本語 8 位の学生が英語 7 位となっており、日本語の成績と英語の成績に、ある程度の相関関係があるように見受けられる。

しかし、日本語テストについては、点数の差が非常に少なく、日本語テスト 6 位の学生は日本語テスト 1 位の学生より、正解数が 3 問少ないのみである。したがって、日本語テスト 6 位で英語テスト 1 位であった学生について、「日本語の成績と英語の成績に相関関係が認められない例」などに見なしてよいのか否か、その判断を下すことは非常に難しいと言えよう。

したがって、上の結果からは、本調査では、予備調査よりも日本語テストの難易度を上げ、点数にある程度の開きが出るようにしたほうがよいという課題を見出すことができる。そうしなければ、個々の学生の日本語力の判定が明確にできず、英語力との相関関係も捉えにくくなってしまおうであろう。

次節では、上にあげた 8 名の学生について、文法・漢字・読解のそれぞれの分野で、どのような問題に誤りが多かったのかを示し、分析する。そして、そこから垣間見える学生の日本語力の問題点について述べたい。

4. 結果の分析

4-1 文法

【表 1】の文法 4「ねじれ文等の誤文か正しい文かを判定させる問題」では、以下の文について、8名中1名しか誤った文だと判定することができなかった。

①私の仕事は、飲料品コーナーを常にチェックし、少なくなった商品を補充します。

「私の仕事は」という主語で始まり、仕事の内容を紹介する文であるため、述語は「補充することです」という名詞句になるべきである。このような主語と述語が対応していない文を、誤っている文だと判定することができない学生は、日頃このような文を書いている可能性が高いと考えられる。

大学生の作文を一文単位で分析した境希里子（1998）では、「気持ちの良い時、私がすることはビデオを見る。」^{xvii}という、①と同じタイプの誤文が見られたことが指摘されている。さらに、境希里子（1998）は、このような文について、「事前に考えをまとめず、頭に浮かぶことを次々に書いていくと、このようになりやすい。」「このような間違いを犯さないためには、推敲の段階で、主語と述語だけを抜き出して確かめることが必要だ。」と述べている。この境希里子（1998）の指摘は、「事前に考えをまとめて書けば、または、推敲の段階で主語と述語を抜き出して確かめれば、このような誤文を書くことをある程度防げるはずである」という意味にも解釈できる。しかし、この考えにはやや疑問が残る。境希里子（1998）とは調査対象者が異なるため断言することはできないが、もし事前に考えをまとめたり、事後に主語と述語を確かめたりすれば文の間違いを防げるのならば、①のような問題で、一文のみに注目できる状況においては、文の正誤について正しい判断ができる可能性が高いことになる。しかし、実際は、主語と述語の対応に着目しやすい①のような問題においても、正しい文か否かを正確に判断できる学生は少なかったのである。したがって、主語と述語が対応していない文を書く学生の多くは、そのような文が正しくないと判断することができない、つまり判断できるほどの正確な文法能力が備わっていないと考えられるほうが妥当ではないかと考えられる。

その予測が正しいか否かを確認するために、今後は、誤文か正しい文かを判定させるテストを行うと同時に、学生達に実際に作文を書かせる調査も行いたいと考えている。そうすることによって、学生達の文法能力をより正確に把握することができるであろう。

4-2 漢字

文中の下線部の漢字が適切か不適切かを判定させる問題において、以下の3問については、8名中1名のみしか正確な判定をすることができなかった。

- ②学生の頃、試験の前日はよく徹夜したものである。
- ③大学生になってからの初めての夏休みなので、有意義に過ごしたいと思います。
- ④漢字の間違いをいくつか指摘されたので、修正したうえで改めて提出した。

以下の問題については、8名中2名のみしか正確な判定をすることができなかった。

- ⑤一度に多くの単語や文法を覚えようとすると、頭が困乱してしまう。

②～⑤の下線部の漢字は、正しくは②「徹夜」③「有意義」④「指摘」⑤「混乱」であり、すべて不適切であると判定するべきである。しかし、適切だと判定した学生が多かった。

一方、以下の3問については、8名全員が下線部の漢字は不適切であると正確な判定をすることができた。

- ⑥妹が初めて作ったカレーライスが、以外においしくて驚いた。
- ⑦当店の自家製スープです。暖かいうちに召し上がってください。
- ⑧県の北部に独徳な言葉遣いをする地域があるので、調査にいろいろと考えている。

⑥～⑧の下線部の漢字は、正しくは⑥「意外に」⑦「温かい」⑧「独特」である。

間違った判定が多かった②～⑤と、全員が正しい判定ができた⑥～⑧について、明らかな違いを認めることは難しいかもしれない。しかし、正しい判定ができた⑥～⑧については、学生達にとって、下線部の言葉の意味と遣われている漢字の意味とを関係づけて考えやすく、明確な理由を持って正しくない判断することができたのではないかと考えられる。つまり、⑥「以外に」は、「考えていたよりも」「予想とは違って」という意味であるため、「以」ではなく、考えや気持ちを表す「意」ではないのか、⑦は、スープについて話しているため、「暖冬」「寒暖差」などの気候に関わる際に用いられる「暖」ではなく、「温野菜」などの食べ物に遣われる「温」ではないのか、⑧は「特別な」「特徴的な」という意味を表すため、「道德」の「徳」ではなく、「特」になるべきではないのかと、他の身近な語彙等と関連付けて判断することができたのだと想像できる。

それに対して、②～⑤については、下線部の言葉の意味と遣われている漢字の意味の関係性が明確にはわからず、なんとなく正しいような気がするという曖昧な認識のもとで判定を下したのではないかと予想できる。まず、②であるが、「徹」も、正しい表記である「徹」も、学生達にとってはあまり身近な漢字ではなく、それぞれが表す意味を正確に理解していないことが予想される。そのため、「てつや」には、「撤去」や「撤退」に用いる「撤」ではなく、「徹底」「貫徹」などの「貫き通す」意味の「徹」が用いられるべきであるという明確な意味付けができなかったのだと考えられる。③の「ゆういぎ」は、意味や価値が

あることを表すため、「有意義」と書くべきである。しかし、「義」も「議」も、「講義」や「議論」等、学ぶことや話すことに関係する言葉に用いられる漢字であるため、学生達はそれぞれの個別の意味を認識する機会を持たずにいるのだと考えられる。④の「してき」は、「間違いを取り上げて示す」という意味があるため、「摘まむ」の「摘」を用いるべきである。しかし、「摘」よりも、「適切」「適当」などの言葉で日頃用いている「適」のほうが、学生達にとっては身近な漢字であろう。さらに、「してき」という行為を、間違いを修正し「適切な」方向に導くものであると認識していれば、「適」という漢字を用いることに全く違和感を持たなかった可能性もある。⑤についても、「こんらん」は苦しく困る状況であり、「困難」等、「困」が遣われている学生達にとって比較的身近だと考えられる言葉もあるため、「困乱」を正しい表記だと認識したのであろう。

境希里子(1998)では、学生の作文における誤字の例として「困乱」が挙げられている。本予備調査で「困乱」や「指適」を間違いだと判定できなかった学生達も、実際に「こんらん」や「してき」という言葉を書き等を書く際に、より身近な字である「困」や「適」を用いている可能性がある。

4-3 読解

資料として掲げている文章及び問いを、「以下の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最も良いものを、1~4 から選びなさい。」という問題文を付して、4 回に分けて出題した。xviii

第1回・第4回の問題はそれぞれ3名のみしか正答が選べず、第2回・第3回の問題はそれぞれ5名・6名が正答を選ぶことができた。なぜ、問題によってこのような違いが出たのかを考えてみたい。

最も正解者の多かった第3回の問題については、本文の最後の文の点線部^{xix}「あぐらをかいてきたというわけではないのです」という部分と、選択肢3の「人間が思うほど楽をしているばかりではない」という部分が同じ意味を表しているため、文章の内容をあまり深く読み込んでいなくても、または理解していなくても、筆者の説明として正しいものは3であると判断しやすかったのではないかと考えられる。また、第2回の問題についても、本文の最後の文の点線部「達成可能だという見通しがある」という部分と、選択肢2の「到達可能な目標ということである」という部分に、「達成可能」「到達可能」というほぼ同じ意味を表す言葉があるため、()に入る言葉、つまり筆者がこの文章で言いたいこととして、比較的容易に2を選ぶことができたのであろう。

一方、第1回の問題については、「そういうこととは、どういうことか。」と、最後の一文自体の内容を問う問題になっているため、第3回・第2回のように最後の一文を頼りに正答を見つけ出すということができなかったということが、正解者が少ない理由であろう。しかし、最後から二文目の「そうした犠牲を払ってもなお実行する価値のあることだと判断したならば実行する。」を意識して読むことができていれば、「そういうこと」の指し示

している内容がわかり、同じ内容が同じ言葉を用いて書かれている 1 を、正答として選ぶことができたはずである。しかし、不正解であった学生達は、全員 2 を選んでいる。おそらく、最後の一文にある「経済的な行動」と、「金と時間に見合った成果を予測」という言葉に関連性を見出し 2 を選んだのだと考えられる。しかし、指示語の内容を問うているのであるから、指示語のある文に注目するのではなく、その前の文に着目すべきである。この問題の誤りの傾向から、学生達が、文の前後を関係付けながら文章を読み進めることができていることがうかがえる。

第 4 回の問題についても、「脳とコンピューターの似ているところはどこか。」という問いであるため、脳についての説明とコンピューターについての説明を、自分なりに関係付けたいうえで正答を選ばなければならず、第 3 回の「筆者の説明と合っているものはどれか。」のような一文レベルでも正答を導き出せる問題よりも難しかったのだと考えられる。4 名が 3 「シナプスのような結び目があるところ」を、1 名が 2 「計算や記憶できるところ」を選んでおり、「シナプス」や「計算や記憶」という 2 回出てくる言葉に影響されて選択したことがうかがえる。正答である 1 の「基本の要素が網のように」という表現は本文では使われておらず、脳とコンピューターのそれぞれについての説明を理解し、「基本の要素が網のように結ばれている」が、両者の特徴をまとめて表している文であるということが見出せなければ、1 は選べなかったのであろう。この問題からも、文と文、情報と情報とを関係付けて読み、考察することが、学生達にとっては難しいことがわかる。

以上のような読解問題の結果から、日本語の授業^{xx}や専門科目の授業において、学生達に「読む」という活動を行わせる際には、一つの文や一つの情報だけを理解させるのではなく、前後の文や、いくつかの情報を結び付けながら読ませ、考えさせる練習を行わなければならないことがわかる。そのような習慣を身に付けなければ、インパクトのある情報のみに影響を受け、短絡的で浅い考察しかできなくなってしまうであろう。

おわりに

以上、本稿では、筆者の本務校における、日本語を母語とする学生を対象にした日本語テストの予備調査の結果を分析した。分析対象者は非常に少なかったが、学生達の誤文・誤字、さらには読解の仕方の傾向をうかがい知ることができた。

本調査では、選択問題だけでなく、実際に学生に作文を書かせる、文章を要約させる等のテストも行いたいと考えている。選択問題という限られた条件のなかでのテストよりも、より実態に沿った日本語力の問題点を明らかにすることができるであろう。

また、予備調査では、学生達の語彙力を問うテストは行わなかった。しかし、筆者が授業をしている際に、同じ学年の学生であっても、語彙量に差があることを実感している。したがって、今後は学生達の語彙力を測る調査も行いたい。

そして、漢字・語彙等の知識量と、文法力・読解力・作文力等の運用能力のどのような要素が、英語力と相関関係を持つのかを明らかにしたいと考えている。

資料：読解問題

【第1回】

限られた時間や財産ですべての目標を達成できないとすると、何かを行うときに犠牲になっているのは、突き詰めてみれば、それによって実現できなくなる別の目標なのです。お金や時間はこうした犠牲を計る上での大切な目安ではありますが、それだけでは判断が不正確になる恐れがあります。一つのことを実行する前に、それを行う代わりに何ができなくなり何が手にはいらなくなるかをきちんと考える。そうした犠牲を払ってもなお実行する価値のあることだと判断したならば実行する。経済的な行動とは、結局はそういうことです。

(南山大学経済学部『大人になるための経済学入門』日本放送出版協会による)

・そういうこととは、どういうことか。

- ① ある目標を犠牲にしてもなお実現させたい目標だけを実行すること
- 2 金や時間に見合った成果を予測して、目標に向け実行すること
- 3 金や時間という犠牲を払っても、なんとか目標を実行すること
- 4 目標が達成できなくなるというリスクを頭にいれながら実行すること

【第2回】

目標を設定するときに考慮すべき点の第一は、()。

新入社員に毎月車を十台販売せよと目標を与えた場合、彼は目標を達成できない自分がなさけなくなり、多分、喫茶店で終日時間をつぶすようになるだろう。つまり、能力以上の目標はメンバーにフラストレーションを与えるだけである。フラストレーションが慢性化すると、やる気がなくなるのがふつうである。やる気というのは努力すれば達成可能だという見通しがある場合に出てくるものである。

(國分康孝『リーダーシップの心理学』講談社による)

・()に入るのはどれか。

- 1 客観的で明確な目標ということである
- ② 到達可能な目標ということである
- 3 慢性的なフラストレーションを与える目標ということである
- 4 能力以上の目標ということである

【第3回】

われわれ人間から見れば、カッコウの^{たくらん}托卵は、親らしからぬ、非常に愛情に欠けた行為に映ります。他種の鳥の巣に卵を置き、ひなに他の卵を蹴落すことまでさせて、まんまと仮親に自分の子を育てさせるのですから、どうしても、怠け者、ひきょう者といったイメージで見えてしまいます。

一方、托卵行為は、カッコウと托卵される側との長い攻防戦の産物でもあります。托卵先となった鳥たちは卵を見分けるなどの知恵を数十年かけて身につけます。カッコウもそれに応じて技術を磨いてきたのであり、ただ子育てを放棄し、あぐらをかいてきたというわけではないのです。

・筆者の説明と合っているものはどれか。

- 1 托卵される鳥とカッコウは双方に利点のある繁殖方法をとっている。
- 2 カッコウは、他の動物がするような無償の愛に基づいた子育てをしない。
- ③カッコウは他の鳥に子育てをさせるが、人間が思うほど楽をしているばかりではない。
- 4 鳥類は、巣の卵が他種の鳥の卵だと分かると子育てをやめるという習性を持つ。

【第4回】

脳とコンピューターが似ているのは、いずれも計算や記憶ができるからだ、と知っている人がいます。しかし、計算や記憶をするのはあくまでも脳であって、コンピューターはソロバンやメモ用紙のような道具に過ぎないのです。両者が似ているのは、その基本的な仕組みです。

脳の主役は神経細胞ですが、その細胞からは細くて長い神経繊維という糸が出ています。そして、その神経細胞の先端は別の神経細胞に接触するという形で、次々とつながってゆきます。その接触するところをシナプスとよんでいます。つまり、脳は神経細胞またはシナプスを結び目とした巨大な神経網と言うことができます。その点が、多数の素子は配線で結ばれているコンピューターと似ているのです。

(千葉康則『ヒトはなぜ夢を見るのか』PHP 研究所による)

・脳とコンピューターの似ているところはどこか。

- ① 基本の要素が網のように結ばれているところ
- 2 計算や記憶できるところ
- 3 シナプスのような結び目があるところ
- 4 メモ用紙のような道具であるところ

注

- i 「6.国語力の向上」以外の「英語教育改善のためのアクション」として、「1.英語の授業の改善」「2.英語教員の指導力向上及び指導体制の充実」「3.英語学習へのモチベーションの向上」「4.入学者選抜等における評価の改善」「5.小学校の英会話活動の支援」「7.実践的研究の推進」が挙げられている。
- ii 本稿における「大学生」「学生」とは、日本語を母語とする者を指す。
- iii 東洋学園大学（東京都文京区にある私立大学である。グローバル・コミュニケーション学部・人間科学部・現代経営学部の3学部から成る。筆者は、グローバル・コミュニケーション学部の専任講師である。）
- iv 東洋学園大学・平成27年度特別研究「第二言語習得への学習者母語能力の相関関係の検証に関する研究」（研究代表者：依田悠介（英語教員）・研究分担者：下山幸成（英語教員）、筆者（日本語教員））
- v ここでの「日本語の授業」とは、東洋学園大学における学部1年生の必修授業「教養基礎演習」及び学部2年生を対象にした選択授業「日本語表現法」を指す。「教養基礎演習」では、大学生として必要な論理的な書き方・話し方を育てることを目標としている。「日本語表現法」では、論理的な書き方・話し方を育成すると同時に、大学生として必要な語彙力・漢字力・読解力を向上させることを目標としている。

- vi 実際に、筆者が外国人に日本語を教える際も母語の影響を感じさせられることがある。具体的には、母国での中学・高校時代に母語による論理的な文章を読んだ経験がなく、論理的な文章を書いた経験もないであろう学習者は、日本語の語彙力・文法力をある程度身に付け、流暢に会話ができても、日本の大学で教育を受けるために必要な読解力や文章力を身に付けることが困難であるように見受けられる。一方、母国での中学・高校時代に高度な文章の読解、小論文の作成、口頭での論理的な意見表明等の訓練をし、なおかつ一定の評価を得てきたと言える学習者は、日本語の語彙力・文法力をある程度身に付ければ、的確に情報を収集し、自らの意見・考察を客観的・論理的に書き、述べるができるようになると思われられる。
- vii ここでの「日本語プレースメントテスト」とは、「小野博氏が中心となりメディア教育開発センターが開発した「プレースメントテスト」の中の「日本語」に関するテスト」であり、「単語力をみることによって日本語の理解能力を大まかに把握」するものであるとしている。
- viii 読点「,」及び下線は、境希里子（1998）の通りである。
- ix 課題文についての「もう一度読み返して、あなたが印象に残った文(または文章)はどの部分でしたか。また、印象に残ったのはなぜですか。」という設問に答えるかたちでの作文である。「課題図書テーマである「続けること」をポイントとして読み取ることができている」場合に、読解力があると判定している。
- x 2クラスとも同じ曜日の同じ時限に開講されているため、予備調査は、両クラスとも、2015年9月15日（火曜日・2限）、17日（木曜日・2限）、24日（木曜日・2限）、29日（火曜日・2限）に実施した。
- xi 「日本語検定」（東京書籍）とは、日本語の総合的な能力（1 敬語、2 文法（言葉のきまり）、3 語彙、4 言葉の意味、5 表記、6 漢字）を測る、日本語母語話者を対象にした検定試験である。7級（小学2年修了程度レベル）から1級（社会人レベル）までの受検級が設けられており、2級は「大学卒業程度レベル」とされている。
- xii 「日本語能力試験」とは、日本語の言語知識（文字・語彙・文法）・読解力・聴解力を測る、日本語を母語としない人を対象にした試験である。N5（基本的な日本語をある程度理解することができる）からN1（幅広い場面で使われる日本語を理解することができる）までの受検級が設けられている。
- xiii 『日本語能力試験スーパー模試 N1』（2014年,アルク）・『日本語能力試験 完全模試 N1』（2012年, Jリサーチ出版）
- xiv 4回目のみ、30の例文を出題した。
- xv 予備調査では、倫理的な配慮から、学生に対して、調査対象者として分析されることを拒否する権利を与えた。実際に拒否をした学生もいたため、分析対象にできる人数が非常に少なくなってしまった。
- xvi 日本語テストの全問題数は、16問×4回で64問である。英語テストの全問題数は、1回目から3回目のテストが各25問、4回目が30問であったため、105問である。正解率は、小数点第2位で四捨五入している。
- xvii 読点「,」及び下線は、境希里子（1998）の通りである。
- xviii 第1回・第2回・第4回は『日本語能力試験スーパー模試 N1』（2014年,アルク）に、第3回は『日本語能力試験 完全模試 N1』（2012年, Jリサーチ出版）に出題されている読解問題である。問題文における棒線やふりがな、引用文献の記載の有無等は、問題集の通りである。ただし、それぞれの読解問題に付されている問題集内における通し番号については、便宜上省いた。
- xix 読解文や選択文における点線及び波線は、本稿筆者が付したものである。また、それぞれの問題の正答番号に、便宜上○を付している。
- xx ここでの「日本語の授業」とは、注vで示した日本語の授業と同じものを指す。

参考文献

- 上村和美・藤木清（2011）「大学入学時における読解力と「日本語運用能力テスト」との関係に関する一考察」（『関西国際大学研究紀要』第12号）
- 境希里子（1998）「日本人学生の文章力における問題点（1）—一文単位でのわかりやすさについて考える—」（『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』第6集）
- 境希里子（2012）「日本人学生のための日本語教育：新都心キャンパスの総合教養科目およびコラボレーション科目の場合」（『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』第20集）
- 酒井志延・中西千春・久村研・清田洋一・山内真理・間中和歌江・合田美子・河内山晶子・森永弘司・浅野享三・城一道子（2010）「大学生の英語学習の意識格差についての研究」（『リメディアル教育研究』第5巻第1号）
- 坂内昌徳（2011）「日本語母語話者による英語の属格関係代名詞節の習得過程に見られる名詞句の接近度階層の影響と母語転移」（『福島工業高等専門学校 研究紀要』第52号）
- 佐藤尚子・吉野文・椎名紀久子（2008）「「文章表現演習」における学生の問題点とその改善について」（千葉大学言語教育センター『言語文化論叢』第2号）
- 佐藤尚子・木原郁子（2009）「「文章表現演習」における日本人学生の変容—グループでの話し合いを通して—」（千葉大学国際教育センター『国際教育』第2号）
- 田島ますみ・佐藤尚子・深田淳・玉岡賀津雄（2011）「記述式試験解答に対する答案としての評価と日本語力からの評価（語彙力を中心に）」（『リメディアル教育研究』第6巻第1号）
- 馬場眞知子・たなかよしこ・小野博（2011）「日本人大学生の日本語力の養成について」（『リメディアル教育研究』第6巻第1号）
- 馬場眞知子・野崎浩成・河住有希子・小野澤佳恵・たなかよしこ（2011）「学力向上の指標となる言語力育成のために日本語力をいかに測るか」（『リメディアル教育研究』第6巻第1号）
- 馬場良二（2006）「英文和訳の日本語力—熊本県立大学の学生の場合」（『熊本県立大学文学部紀要』第12巻）
- 藤田直也（2008）「英語リメディアル教育における日・英語比較の活用」（『リメディアル教育研究』第3巻第1号）
- 松本広幸（2012）「英語と日本語の読解方略使用における関係性の比較」（『北海学園大学学園論集』第153号）
- 山本哲生（2013）「大学一年生における「漢字力と漢字学習」の現状と課題—「教養国語」の授業を中心に—」（『四国大学紀要』第39号）
- 山本裕子（2013）「日本人大学生の「書く力」の発達に関する縦断的研究（小論文に見られる特徴から）」（『リメディアル教育研究』第8巻第1号）
- 渡辺誠治（2011）「日本語プレースメントテスト活用の可能性」（『リメディアル教育研究』第6巻第1号）